

中学生の自己効力を高め効力予期の情報源の増大を図るための試み —構成的グループ経験を通して—

学校教育専攻
教育臨床コース
中村 敦夫

指導教官 田中 雄三

1 問題と目的

Bandura, A の提唱した概念に、自己効力 (Self efficacy) がある。ある結果を実現するための行動が「遂行できるかどうか」を効力予期と呼び、知覚された効力予期が自己効力である。自己効力は、「遂行行動の達成」「代理的経験」「言語的説得」「情動喚起 (生理的状态)」の4つの情報源によって基礎付けられるという。自分に自信が持てるようになりさらにやる気になった生徒については自己効力の高まりで、引込み思案の生徒はその低下で説明ができる。

本研究では、このような概念に焦点を当て、『構成的グループ経験 (SGE)』を通してのアプローチを試みる。すなわち、①中学生に『構成的グループ体験』を実施することで、自己効力を高めることができる、②中学生に『構成的グループ体験』を実施することで、効力予期の情報源の増大を図ることができる、の2点を検証することを目的とする。

2 対象と方法

(1) 対象

実験群としてC中学校1～3年の生徒127名 (男子66名, 女子61名), 統制群として比較的似た環境下にある同A県B郡内のD中学校1～3年の生徒115名 (男子62名, 女子53名) を採択した。

(2) 方法

実施期間: 2002年4月23日～同年6月19日

実施方法: 『構成的グループ経験 (SGE)』による自己効力の変化を坂野, 東條 (1986) の「一般性セルフ・エフィカシー尺度 (GSES)」と筆者の作成した「効力予期情報源」調査の質問紙を用いて一斉に行い、授業前後で比較した。

授業の実践内容: 各学年50分授業×9回

主な内容は次の通りである。

- #1 あいこジャンケン, 誕生日チェーン
- #2 ジャンケン列車, みんなから一言
- #3 聖徳太子ゲーム, 友だち大好き
- #4 タイムトラベル, トラストウォーク
- #5 仲間探し, ヒューマンチェーン
- #6 背中合わせの会話, クリスマスツリー
- #7 なんでもバスケット, 私はワタシよ
- #8 私の短所, 時間半分トーク
- #9 こう見えても私は, xさんからの手紙

授業後に、毎回振り返りシートで、生徒の思いや心の変動を把握できるようにした。

3 結果

(1) 一般性セルフ・エフィカシー尺度 (GSES)

① 因子分析 (主成分分析, Varimax 回転)

「行動の積極性」, 「失敗に対する不安」, 「能力の位置付け」の下位尺度3因子に分かれた。

② 授業後段階での比較 (t 検定)

実験群の「能力の位置付け」では統制群に比べ有意に高い傾向があった ($p < .10$)。

③ 授業後段階での男女別比較 (t 検定)

実験群男子では「能力の位置付け」で統制群

に比べ有意に高くなったが ($p < .05$), 女子では有意差はなかった。

④授業後段階での学年別比較 (t 検定)

1 年生では実験群の「GSES」で統制群に比べ有意傾向で、「行動の積極性」で有意に高かった ($p < .10$, $p < .05$)。3 年生では実験群の「能力の位置付け」で有意に高かった ($p < .10$)。

⑤実験群の三群別の授業前後の比較 (t 検定)

上位群では「行動の積極性」と「GESE」の事後の数値が有意に低く ($p < .01$), 下位群では「GESE」, 「失敗に対する不安」, 「能力の位置付け」, 「行動の積極性」の全てで実験群が有意に高かった ($p < .01$)。

(2) 効力予期情報源調査

①得点の授業後段階での比較 (t 検定)

授業後段階では「代理的経験①」で実験群の数値が有意に高かった ($p < .05$)。

②授業前後の男女別比較 (t 検定)

実験群男子では「効力予期情報源」得点で有意に高くなった ($p < .05$) が, 女子では有意差はなかった。

③授業前後の学年別比較 (t 検定)

実験群 1 年生では「代理的経験②」で事後の数値が有意に高くなる傾向があった ($p < .10$)。2 年生では「効力予期情報源」得点と「代理的経験①」では実験群が有意に高くなった ($p < .01$)。3 年生では「情動喚起・生理的状态」で有意に下がる傾向があった ($p < .10$)。

④効力予期情報源得点と GSES 得点との相関 (Pearson の相関係数)

両者の相関は確認されなかった。

⑤GSES 得点三群別の授業前後比較 (t 検定)

実験群の上位群では「効力予期情報源」得点と「代理的経験①」で有意に高く, 「代理的経験②」で有意傾向に高かった ($p < .05$, $p < .10$)。

中位群では「効力予期情報源」得点と「代理的経験②」で有意傾向で高くなった ($p < .10$)。

(3) 振り返りシートによる授業評価

①評価項目による授業評価

SGE の授業に対する総合的な満足度は、「はい」「まあまあ」の回答が多かった。質問項目の「1 楽しさ」と「3 集中」について相関傾向があった。「1 楽しさ」「5 今後も受けたい」についての回答には有意な相関があった。

②自由記述による授業評価

「楽しさの表出」が非常に多かった。#8 での数値の低さは「話す」「聞く」への困難さの表れ (訴え) と考えられる。

「肯定的評価」では仲間同士の協力やふれあい (身体接触), また, 動きのあるエクササイズが選ばれ, 仲間からの受容感, 自分のよさの再確認, 心と心のふれあいのエクササイズが選ばれていた。エクササイズやプログラムについての否定感は少なかった。

4 考察

構成的グループ体験の実施は中学生男子の「自分の能力の自己評価」を高めるのに有効であり, 下位群の数値の上昇があったことから低自己効力群の生徒の「失敗に対する不安」を軽減する効果が推測される。

また, 本研究の SGE プログラムの実施は中学生男子の「身近な人の成功例を観察し, 自分も自信を持てる」ようになる生徒を増やすのに有効であり, その傾向は 2 年生で顕著であった。

今後の課題として以下のことが挙げられる。

- (1)年間計画立案の際の, セッション内容やプログラム構成についての対象に応じた工夫。
- (2)中学生の自己効力を測るのにより信頼性と妥当性のある尺度の開発と効力予期情報源調査についての尺度の検討。